

結論として、桜井王と聖武天皇の贈答歌は、同性同士で詠まれた相聞歌であるが、ただの相聞歌としてとらえるのではなく、桜井王の贈歌を受けて聖武天皇が反発性を持つ歌を歌うことで両者の親密度を表すだけでなく、天皇と王とのやり取りによって場を和やかにしたと考えた。本稿ではそのやり取りの場は集中のほかの用例から考えるに宴の場ではないかと推察した。このように新しい相聞歌や贈答歌の形が、ただ歌を贈り交わすよりももっと幅広く、発展させた形になっていったことがうかがえる。

桜井王は聖武天皇に本当に近い人達のうちの一人であり、それは贈答歌のやりとりなどから十分うかがえることである。桜井王の集中に残る歌が二首とも聖武天皇と深く関わり合いがあるのは、おそらく風流侍従として聖武天皇の傍にいたことも含めて関係があったものとして考察した。

柿本人麻呂研究

—— 羈旅における「神」 ——

岡本 英理

宮廷歌人である柿本人麻呂は、行幸歌や挽歌などを天皇に近い場所で歌うことが多い。そしてその歌からは、天皇や皇子を非常に大きな存在と感じていたことがうかがわれる。

本論は人麻呂の巻三にある筑紫下向歌を当該歌とし、同じ巻三にあり、同じ瀬戸内海で歌われた羈旅八首とを比較しつつ、当該歌で歌われる「神代」とはどういったものであるか。また、当該歌と羈旅八首はどのような関係にあるかについて考察した。

当該歌で歌われる「大和島根」は天皇の治める場所であり、「遠の朝廷」も天皇の治めている大和の国の離れたお役所であり、と、

人麻呂は全てにおいて天皇を意識した表現を使っている。ここから、当該歌は筑紫への旅で歌った羈旅歌であり、行幸歌ではないが、羈旅歌の形を取って、天皇讃美を歌ったものであると考えた。当該歌と羈旅八首は同じ羈旅歌ではあるが、羈旅八首では土地誉めと家や妹への思慕の双方を歌い、当該歌は土地誉めも果たしているが、歌う対象は「神代」であり、使われる表現も吉野讃歌に見られるような天皇讃美である。当該歌で人麻呂は自身が使っている持統天皇の代を「神代」とした。当該歌のように天皇のいない旅で、なおかつ、都から遠く離れた筑紫への旅の中の天皇讃美をした歌は特殊である。本論では当該歌は、人麻呂が「旅の中で歌う天皇讃美の歌」を生み出したものであると結論した。

後期万葉における皇族歌研究

—— サロンの形成 ——

小川 範晃

後期万葉には数多くの皇族たちが歌を残しており、その中でも贈答歌や宴席歌を数多く詠んでいる。

本論では、後期万葉を奈良遷都から天平五年までを第三期、天平五年から天平宝字三年正月までを第四期とし、皇族たちがどのような人たちとサロンを形成していたのかを見るため、第三期、第四期の皇族の名を挙げ、巻別、年代別、歌人別などに分類した。本論では特に、女王、橘氏、大伴家持に注目し、皇族との関係を考察した。

結論として、女王たちは贈答歌を多く詠んでおり、その中でも大伴氏に対して贈答歌を多く詠んでいた。宴席で歌を詠んでいるのは、久米女王と河内女王、粟田女王だけであった。

後期万葉の皇族たちは、橘諸兄、奈良麻呂の橘氏や大伴家持を中心としてそれぞれサロンを形成していた。特に大伴家持は多くの皇族と親交があり、それがいくつものサロン形成に繋がったのである。

後期万葉における皇族の宴席歌は橘諸兄、橘奈良麻呂、大伴家持の存在が大きくこの存在なしでは後期万葉のサロン形成は成し得なかったのである。

万葉歌人市原王

—カグハシ表現をめぐる—

河澄 祥代

万葉集において、香りに関する歌というものは非常に少ない。そのことは本居宣長が著書「玉勝間」において紹介している。その中で数少ない香りに関する歌として挙げられているのが四五〇〇番にある市原王による梅の歌である。

万葉集には梅を扱った歌が多く存在する。梅の花がその白さから雪との対比で歌われること、花が散るさまを歌うのは周知である。だが香りに注目して歌われるのはこの一首のみである。本居宣長はこの数の少なさから、この時代に香りは愛でられなかったとしているが、はたしてそうなのだろうか。

本稿では万葉集に存在する香りに関わりのありそうな語と対象となる事物をあらためて探だし、その語の使われ方や歌われ方を考察した。その結果、ニホフ・カナル・カグハシの語があることがわかり、ニホフは主に視覚的であることがわかった。カグハシについては対象は橘が多く、梅を対象とする歌は一首みられた。またこの橘もほとんどが「玉に貫く」といった薬玉を対象とした歌われ方で

ある。

香りは漢詩には多く詠み込まれることや、歌の序としては詠まれていることがわかった。愛好の対象とされていたのである。

ではなぜそれが和歌には反映されないのか。漢詩や序には歌われる香りと和歌での香りには違いがあるのだろうか。本稿では他の数少ない香りを詠み込んだ歌や、その歌を作った人物と市原王との関わりを中心に考察した。

万葉と文雅

—風流侍従門部王について—

菊畑 瑞穂

万葉第三期、「風流侍従」と称される人達の存在したことが、「家伝 下」に記されていることは、既に広く知られている。その列挙された中に「門部王」の名がある。門部王は、集中に五首の和歌を残している。その数は、万葉歌人として多いほうではないが、「風流なる侍従」と呼ばれた万葉歌人がどのような歌を残したのだろうかと思ひ、その五首について作品性を知ろうと試みた。また、「風流侍従」についても考察した。

結論として、門部王の歌は五首各々において単純なものではなく、技巧の凝らされた味わいのある作品性を持つものであった。景を叙述し抒情に用いる技法を得意とし、またその景を序詞に用い、情を強める歌い方もした。また、人麻呂の模倣と言われる作の中にも、門部王独自の歌い方がされており、作品性において両者を比較する上で人麻呂の作が高く評価されていることに対し、それは「時代的傾向」の相違とみて各歌が持つ性質は異なると考察した。万葉歌人であり、「風流侍従」でもある門部王ならではの歌い方だった